



入籍

開命二女孺

全貌子母

13
3258



門へ 13
號 3258
卷

昭和十一年
三月五日
日 辨 示

序

加賀 石川 氏 蔵

まは 花 秋 紅 葉 の 色 上 戸 一 壺

の ま 糸 白 糸 紅 林 間 酒 を 燗 め

是 ぞ 心 樂 更 増 酒 を 饗 ぶ 竹 乃

伐 の 小 節 の 小 奇 三 味 線 つ ぎ て 日 廻

負 ぶ 秋 森 妓 乃 物 言 出 入 り せ り 一 壺

浮 世 丸 楽 更 増 酒 を 饗 ぶ 竹 乃

高木 宗 秋 平

第二 廓の入り口よりして遠く喧嘩の相子

親よりま宵中に驚かす高き高き音の響き
勢ありきりし山に瀧方流流つて母の傳言
根をさして款のぬきぐまぐまどまた方のと

第三

妹よをを墨火煙高つて足取婦が云向

兄弟は娘よとぞきた親のまらり子と云
おぼほさぬのお影で女命とねがみぞ云
盗人をさしてまれば姉もとあれ出まを

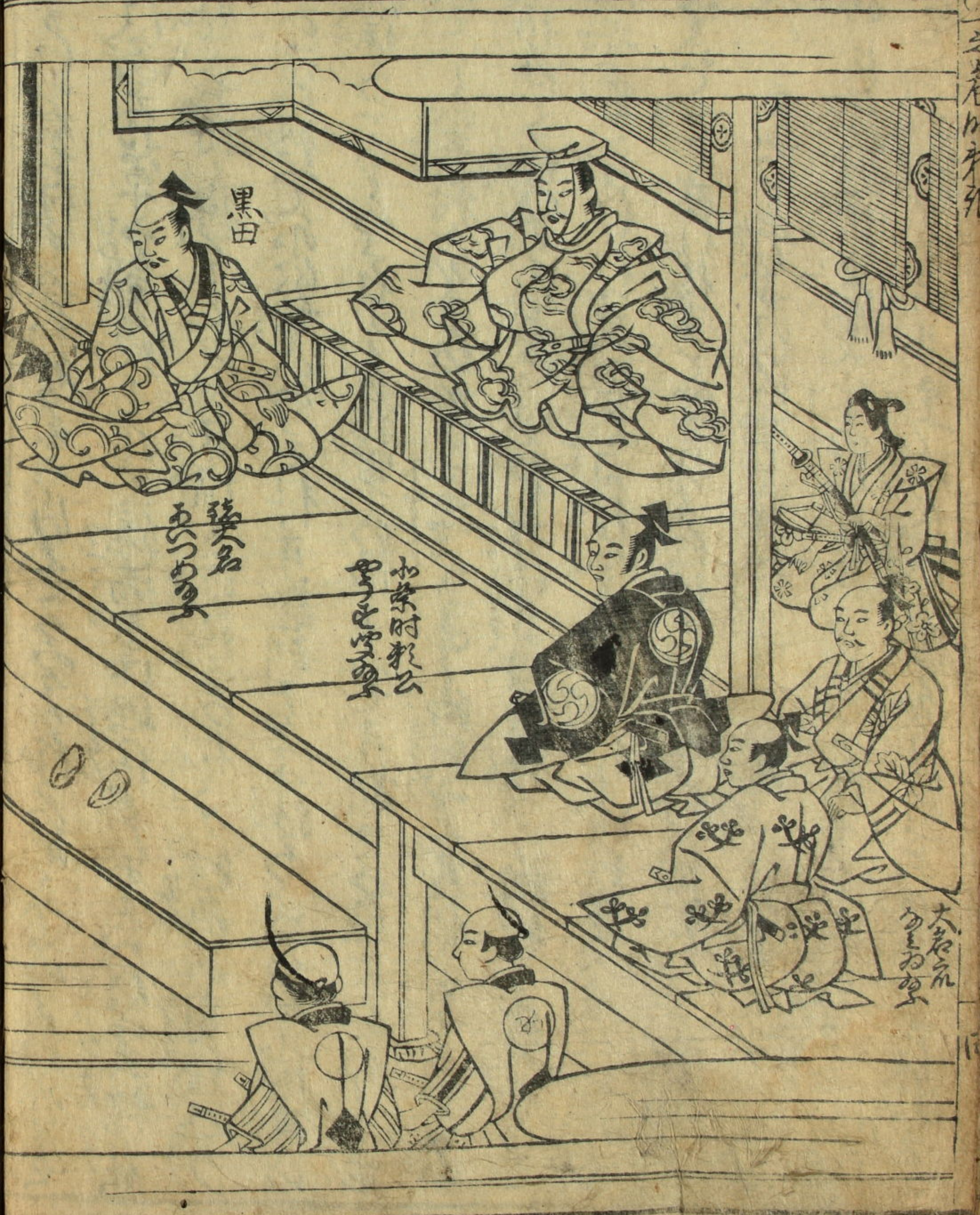
一 輕い成就の強いらぬの門才

貞親五年にありて五穀考の唐氏を重んじて斗米三錢
すまじの唐の志を代に行政令を相付て強金の
執権職に下位下相掾を附親の政務を以て仁急有るに
不申し世に多く安んずるにやと云長初言のほろあ
とまらば万民を徳に導く上下に悦び樂みたり。されば本おれ嗣
ていふ武の才は昧くゆりく。操業は具とせりて能く
政事には心とせられざれば是れ世の基なりと云へ神の
なりはほほほ院才一のま。ある親王と云ゆり人達をもち
とゆたすいされば。行く國をゆりて流る所をせりては
ゆりて先武おれ嗣と。少多家と怒り。ゆりて何れと



老母
いせん
うご

おれ
おれ
おれ



黒田

張名
あつ

小糸時
おと

大老
おと



龜谷平